

<全体分析>

試験時間 90分

<p><b>解答形式</b>                  論述式、選択式。</p> <p><b>分量・難易(前年比較)</b>                  分量(減少・やや減少・変化なし・<b>やや増加</b>・増加)                  難易(易化・やや易化・<b>変化なし</b>・やや難化・難化)</p> <p><b>出題の特徴や昨年との変更点</b>                  大問2題。小問は各3問であるが、2～3に分割されている小問もある。論述の字数と設問数は50字程度6問、100字程度3問、150字程度2問で、計11問、総字数は900字程度である。総字数は昨年と同じであるが、50字程度の短い論述が増え、全体の論述設問数が増加した(昨年は7問)。地図、グラフなどの資料の使用が定着しており、今年は地形図も出題された。</p> <p><b>その他トピックス</b>                  特になし。</p>
---

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
(I)	論述式 選択式	東アジアとその周辺地域	問1 (a)内陸の乾燥地域の成因(50字)、(b)黄砂の拡大の背景(50字)、(c)日本で春に黄砂が観測される理由(50字)	標準
			問2 (a)グラフの国名判定、(b)日本、韓国、中国に共通する人口動態の新局面と、それが非大都市圏の地域に与える影響とその政策的対応(150字) 政策的対応については日本・韓国と中国とを分けて書くとうい。	やや難
			問3 中国への日本の海外投資と産業立地の変化(150字) 図4のグラフから読み取れることのほか、産業立地の変化にも言及する。	やや難
(II)	論述式	日本や諸外国の地域変化	問1 (a)2つの集落の地形的特徴と立地条件の読図(50字)、(b)1970年代に形成された住宅地の現在の社会的課題と原因(50字)	標準
			問2 (a)1930年の北海道と福岡県の所得が高い共通の理由(50字)、(b)1960年から1980年までの大都市圏と非大都市圏の所得変化の理由(50字)、(c)東京一極集中の原因(100字) (a)の石炭はもはや歴史的知識の内容であろう。(b)は2つの指定語句をヒントに東京が有利な点を具体的に述べよう。	やや難
			問3 メキシコにおける国内地域間経済格差とその背景(100字) 指定語句の「USMCA」から北部、「プライメイトシティ」から首都地域の所得が高いこと、農村部や南部は所得が低いことを述べる。	標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

## <学習対策>

教科書の内容を十分に把握して地理に関する知識を深めるとともに、論理的で簡潔な文章を書く訓練をしておこう。基本的な論述練習としては、地理用語や教科書の小項目を50～150字程度で説明したり、要約したりすることから始めるとよい。論述問題では出題の意図を把握することが重要になるが、そのためには、阪大の過去問だけでなく、他大学も含めて数多くの論述問題に触れ、さまざまなタイプの問題に取り組んでおく必要がある。書く内容についての知識とともに、文章を組み立てて答案に仕上げる練習も必要である。事実関係を説明させる問題だけでなく、統計・地図の読み取りから理由や背景を論述させる問題も出題されているので、統計やグラフの読み取りを含む論述問題は重点的にやっておこう。また、時には（I）の問2のように、教科書に記載の少ない事項や教科書からやや離れた時事問題も出題されているので、新聞などを読んで、世界各国についての時事問題や現代日本の地域問題・社会問題などにも関心を持っておこう。